

問わず語りの 人間力原論

高見大介



経験がつくる未来

勢力が最強クラスと言われた台風14号が過ぎ去り、朝晩は肌寒いほどの気候に慌てて上着を引っ張り出した。先日まで暑い暑いと愚痴を言っていたのに、この極端な気温の変化に身も心もまだ対応できていない。今回の台風で、計画していたボランティア合宿が延期になったのだ

が、そのような中で一つ思い出したことがあった。

約10年前、学生と共にインドネシアで教育ボランティアの活動をしていたときのことだ。僕たちが現地を訪れる1カ月前、インドネシアは大洪水に見舞われていた。その復旧作業を横目に子どもたちと交流活動を行ったのだが、現地で調整してくれた非政府組織（NGO）のスタッフと、最終日に大激論になった。

現地スタッフは、大きな災害であったにも関わらず人的被害が最小限であったこととその要因とインドネシア人を誇り「雨が降ろうが槍が降ろうが仕事に

行こうとする日本人はどうかしている、命が一番だということを分かっていない」と言った。これに僕は苦し紛れに「命が大切なのは分かっている。しかしその勤勉さと責任感が先進国日本をつくり上げたのも事実だ」と反論した。今思えば僕も若かったと痛感するのだが。

これまでの日本なら「台風の中、学生と合宿しました」といえば熱心だと評価されたが、今では危機管理ができていないとお叱りを受ける時代になった。インドネシアで出会ったNGOスタッフの言う通りになったのかもしれない。そして僕自身も、この社会の大事を取る風潮に賛

同できるようになった。

その心境の変化は、災害によって大切なものを失う人々の姿に心を痛めた経験をしたからだと思う。今回の台風でも多くの人々が事前に備え自らの命を守る行動を取ったこと、これを誇りに思い、忘れないようにしたい。そして思う。計画が大きく狂ったとしても振り出しに戻っただけで、ゲームオーバーになったわけではないということ。

たかみ・だいすけ 日本文理大 人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。42歳。